
カーナ・ラトリーの受難

よしなが あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カーナ・ラトリーの受難

【Nコード】

N5128A

【作者名】

よしなが あこ

【あらすじ】

魔道学校魔術科高等部の才女カーナは、神術師の彼氏の法力を吸い取る呪いに冒されていることを知って大慌て。冷静で淡白な母の力を（いやいや）借りて、呪いの解除に挑む！

理不尽な呪い

「……ただいまあ」

意気消沈した表情で自宅の扉を押し開け、カーナはとぼとぼと居間へやってきた。由緒正しい魔術師の家系であるカーナの家は、その土地でも名の知れた名家だ。もちろん代々受け継がれてきた偉大な魔術師の血を引くカーナも、魔道学校魔術科で断トツの成績を維持続けている。

「あらお帰り、カーナ」

落ち着いた色調の広い居間の中央で、カーナの母親が砂糖菓子をつまみながら微笑んだ。カーナはそんな母には目もくれず、肩から鞆を下ろして柔らかなソファに腰掛けると、ため息とともにうつむいた。母はその様子を見ると、お茶を飲む手を休め、ずっとカーナへ身を乗り出す。

「何よ暗い顔して。彼にでも振られたの？」

カーナは泣きそうな顔で母を見た。カーナが幼い時から全く変わらない美しさを保つ母は、常に冷静で客観的に物事を判断する。冷静すぎて、物言いに温かみを感じられないのが玉に瑕だが。

「振られてないわよ母様。でも、その彼のこと……」

母はうなずきながら、カーナを見守るふりをして砂糖菓子を口に放り込む。相変わらず人の話を真剣に聞かない母親ね、と内心ムツとしながらも、カーナはぼつりとつぶやいた。

「私の彼のシオ、最近変なの。だんだん法力が弱まっていったるような感じがして……悪い病気にでもなったんじゃないかと思って、心配でたまらないのよ」

「法力……てことは、シオくんは神術科の子なのね」

「そうよ、神術科でも1、2を争う法力を持ってたはずなのに、どうしたのかしら」

カーナの母はそれを聞くと、大きくうなずいてお茶を一口すすった。

「そりゃそうでしょうよ。あんたが吸い取ってるんだから」

「ええっ!？」

「私たち、呪われてるのよ」

こともなげに、あっさりと言い放つ母。カーナが愕然として目を見張ると、母はまたお茶を一口飲み、淡々と語り始めた。

「何代前だったかしら、先祖が神術師の娘と恋仲になってね。その時に先祖のお父上が禁呪を使って魔王を召喚し、神術師と結婚できないように自分の血筋に呪いをかけたらしいのよ。神術師と触れ合うとその力を吸い取り、自分の力にしてしまうようにね」

「ようにねって……禁呪なんか使ったの!？大罪じゃない!」

「そう。だから誰にも内緒よ。うふふ」

「うふふじゃないわよ! ちょっと待って、じゃあその呪いは今も解けてないってことなの?」

カーナが青褪めながら早口でまくしたてると、母は遠い目をして首をかしげた。

「そうよ。私も神術師とだけは付き合えなかったものね、見る間に法力が失われていくから、可哀そうで。契約を破棄しない限り、呪いは延々と続くでしょうね」

「じ……冗談じゃないわ、何とかしなきゃ!」

そういえば、シオと付き合いはじめてから自分の魔力が高まっていることには気付いていたが、まさかそんな理由だったとは!カーナは立ち上がり、銀色の長い髪を翻して鞆を引っつかむと、足音高く居間を出て行こうとした。父の書斎にぎっしりと並んでいる魔道書を漁り、呪いを解除する方法を調べるために。すると母がカーナの後ろ姿に呼びかけた。

「あんた、シオくんのこと本気なの?」

カーナの足がピタリと止まる。

「結婚して束縛して独占欲全開よ!とか思うくらい本気なの?」

「そっ、その言い方はちょっとアレだけど……」

カーナはシオの姿を思い浮かべた。柔らかなさざ波のように綺麗な水色の髪、端正な顔立ち。神術科と魔術科の生徒が合同授業を始める高等部になるまで、彼の存在に気付かなかったが、一目会ったその瞬間からカーナはシオに惹かれてしまった。そしてシオの方も才能あふれる愛らしいカーナを一目で気に入った。惹かれあってしまった者同志、その日のうちに交際が始まったのは言うまでもない。

「シオは今までの男の子たちとは違うもん……だから本気よ、ずっと彼だけを見続けていくつもり……なの」

「ふうん」

母は、語尾に力が入らず消え入るような声でつぶやくカーナに、大げさな相槌とともに意味ありげな目を向け、ぽつりとつぶやいた。

「……エルジットくん」

「うっ」

カーナはぎくりと身を縮める。

「サーシャくん、マルトリアくん」

「ううっ」

両手で頭を抱えて呻くカーナを見つめ、母は冷淡に言葉を繋ぐ。

「エブロイ先輩、コートルド先輩、アルディ師範、ザイルくん、ファートくん……まだまだいたわね、名前忘れちゃったけど。その子たちと付き合った時も、あんた同じこと言ったわよね。どの子も半年ともたずにサヨナラしてたみたいだけど？」

「え……えと……あ、あの時はあの時よ、今は違うの」

「そーゆー移り気なところは誰に似たのかしらねえ」

ため息をついて立ち上がる母に聞こえないように、絶対母親に似たのよ、とつぶやくカーナ。その途端母に鋭く睨まれ、カーナは愛想笑いを浮かべてかぶりを振った。

「まあいいわ、不出来な娘のために良き母親が苦勞するのは世の常なのよね」

「私の出来と呪いは関係ないでしょーが！」

「いいから地下室へいらっしやい、魔王を呼び出してみましょ」

魔王召喚

「いいから地下室へいらっしやい、魔王を呼び出してみましょ」

またもあっさりと言い放つ母。カーナは歩き出す母の背中を前に、一瞬言葉を失って呆然となるが、すぐにその後へ追いつがって叫んだ。

「ちょ、ちょっと、まさか禁呪を使うつもり!？」

「そうでもしなきゃ魔王なんて出てきやしないわよ」

「でも、もし魔道取締役局にバレたら!」

「そうよ、大変なことになるわ。うまくやりなさいよ」

「へ?」

話の展開が妙な方向へ傾きだした。カーナは冷や汗が滲む額を拭いながら、地下室の扉を開ける母に向けて、猫なで声を投げかけた。

「あ、あのく……もしかして、私が魔王を呼び出す……の?」

がちゃん。

扉を開け放った母が、鋭く振り返った。

「困ってるのはあんたなんだから、当ッたり前でしようが」

「ひ、ひええええ!」

……

暗い地下室の四隅にある銀の燭台に、小さな灯りが点った。燭台には13本の蠟燭が立てられていて、その光が妖しく地下室を満たしていく。カーナは蠟燭の一本一本に向けて指を鳴らし、火を灯しながらうなだれていた。

「何でこうなっちゃうのよ……」

地下室の中央にはすでに魔方陣が二つ描かれていて、それを書き終えたカーナの母がにやりと笑う。

「これでよし、と。さあて、後は呪文を詠唱するだけね」

「……何か楽しそうね、母様」

恨めしげに母を見つめるカーナ。

「そんなに楽しいなら、可愛い娘のために母様が呪文唱えてよ」

「甘ったれてんじゃないの。私は別に呪いがかかっていようがいまいが、今の生活に支障はないもの。呪いを解きたい本人が魔王に契約破棄を申し出ないと意味がないじゃない」

「本当かなあ……」

訝しげに母を睨むカーナ。そんな視線も跳ね返すかの勢いで、母はカーナに黒い背表紙の分厚い魔道書を手渡した。

「ほらほら、蠟燭は全部点いたの？ 蠟燭が点いている間じゃないと魔王は呼び出せないのよ、急いで！」

カーナは慌てて手前の魔方陣の中央に立とうとするが、ふと思いついたように蠟燭を見つめ、母に振り返った。

「もっと長い蠟燭に取り替えれば問題ないんじゃないの？」

「あらダメよ、成人男性の人差し指の長さ以下ってちゃんと規約で定められてるのよ」

「な、何その規約って……」

がくりと肩を落とすカーナ。魔方陣の中央に立ち、魔道書を開いて呪文を詠唱しようと口を開きかけた矢先、またも不安げに母へと振り返る。

「……魔道取締局に感知されたりしない？」

「だから私がここにいるんじゃないの。魔方陣書くだけで役目を終えたつもりはないわよ、見てなさい」

カーナの母は魔石の指輪をかざし、小声で呪文を詠唱する。その途端、目に見えぬ厚い空気の膜が地下室を満たした。魔力を遮断する濃密な空気によって、地下室の壁が揺らいで見える。カーナは小さく舌を出し「やっぱりすごいわ」とつぶやくが、母はそれを聞くと同じく舌を出し、肩をすくめた。

「そうでもないわ。あんたに言われるまで魔力遮断のことすっかり忘れてた」

「かかか母様ッ、私を罪人にしたいわけッ!？」

「はいはい、悪かったわよ。ほら早くしなさい、蠟燭が燃え落ちちゃうわよ」

カーナは湯気が立ちそうなほどの苛立ちを無理やり押しとどめ、魔方陣に向けて魔石の指輪をかざし、呪文の詠唱を始めた。禁呪と呼ばれるだけあってその呪文は飛びぬけて長く、詠唱には相当に時間を費やす。カーナは流れるように早口で詠唱し続け、最後の一文

を唱える段に差し掛かった。

「深淵の闇に集う荒ぶる魔神を束ねし地底の覇者よ、我はカーナ・ラトリー、我が呼びかけに応えその姿現し給え！」

ようやく詠唱を終え、ホッと息をつくカーナ。

その一呼吸後に、カーナの母がぼつりと言った。

「……間違ったわよ」

カーナの立つ魔法陣の隣、魔王が現れるはずの魔法陣から、きな臭い匂いとともに紫色の煙が立ち昇り始めた。

「わ、私どこか間違ってた!？」

「途中、一文節抜けたわ。何が出てくるか分からないわよ」

「えええーっ、ど、どうしよう母様！」

「まあ、食われないように頑張ってるね」

あんた鬼ですか!？　と言いかけた、その時。焚き火が大きく弾けるような音がしたかと思うと、魔法陣の中から黒い影が立ち上がった。

執事さんの言うことにや

『お呼びでしようか？』

黒い影は、額の真ん中から襟足まで小さい角がずらりと並んでいる、小柄な老齡の魔物だった。魔王というよりは、魔王の執事といった感じだ。

「あ、あなたが魔王……ですか？」

『わたくしは魔王様の執事でございます』

カーナはがくりと仰け反った。まんまやんけ！

少し気が抜けてしまったが、せっかく召喚したのだから仕方がないということで、カーナは魔王の執事に手っ取り早く事情を説明した。

「……というわけで、その契約を破棄したいんです！」

『はあ、なるほどなるほど』

「わ、分かってくれました？」

『事情は分かりましたが、わたくしは執事でございますので、個人契約の事情には精通しておりません。その手のお話はやはり魔王様ご本人でないと分かりかねると思われます。しかし、どの魔王様とご契約なさったか覚えておいでですか？』

首を傾げるカーナ。一瞬にして不安が胸いっぱいに渦巻いた。

「どの魔王……って」

『はい、魔王様はお一人ではございません。』

「ええッ！？う、うそおお！」

思わず素っ頓狂な声を上げるカーナ。母はその後ろで高見の見物よろしく、ポケットに隠してきた砂糖菓子をちびちびとつまみ食いしている。

『魔界には100をゆうに越える数の魔王様がいらっしやいまして、弱肉強食の理に則って目まぐるしく代替わりをなさいます。ですので、その当時の魔王様を探すのは、もはや不可能かと。「勇者」とか申す乱暴者に倒された魔王様も結構いらっしやいますし』

「じゃあ、契約を破棄することはできないの!？」

『ご安心下さい、魔王様を特定することはできずとも、契約書そのものはまだ契約管理室に残されているはずです。魔王様を召喚されますより、契約管理室長を召喚された方が早道かと思われます。』

そこまでつぶやいた瞬間、魔王の執事は唐突に煙となって消失した。

あっと思って周囲を見たカーナは、左隅の燭台の蠟燭が数本、消えてしまっているのに気付く。可愛い顔に似合わず、舌打ちしながら小さく毒づくカーナ。母は黙ってその様子を見つめていたが、狼狽するカーナに向けて、一言。

「……魔道学校魔術科高等部の秀才も、大したことないわねえ」

半ば無理やり禁呪を唱えさせておいて、その言い草はどーよ!?!? 拳を握り締めながら、目いっぱい反論を試みるカーナ。

「でっ、でも今の聞いたでしょ、魔王は100人以上いて、当時の契約を結んだ魔王を召喚するのはもう不可能だって! 契約管理室長とかいう魔族を呼び出せばいいってことが分かっただけでも、収穫

だと思わない!？」

「失敗を言い繕うのは敗者の美学よ」

「だーかーらっ、人の話聞いている!？」

目を吊り上げて声を荒げるカーナを一瞥し、常に冷静沈着な母は腕組みをして言い放つ。

「で? どうすんの？」

「ど、どうって……」

「契約管理室長とやらを呼び出すまで頑張るの? それともさっさとあきらめてシオくんとは別れる? 私は別れた方が手っ取り早いと思うわよ、どーせあんたはすぐその子にも飽きちゃうでしょうから」

わなわなと震えながらその声を聞くカーナには見向きもせず、母は堂々と言い切った。痛いところをぐさりと突かれたカーナは口の端を引きつらせながら、鋭く母を睨みつける。

「そっ……そこまで言われちゃ引き下がれないわ、意地でも契約管理室長を召喚して見せるわよ!」

「あ、そう」

カーナの勢いのいいセリフの後に、軽々と返事を返す母。そして美しくも冷たい薄笑いを浮かべ、カーナにすっと手を差し出した。カーナがその手に目をやると、母は楽しげにつぶやいた。

「でも、召喚を続けるからには、私の力がないといけないのよね」「えっ」

「魔力遮断の魔術はその都度唱え直さないと維持できないの。結構大変な魔術なのよ、分かる?」

カーナがぴく、と眉間に皺を寄せた。母の指が滑らかに動いて「何か」を要求する。

「助力を仰ぐ者の礼儀よカーナ。何て言うのかしら？」
「んぐ……っ」

何て恩着せがましいの！？我が親ながらむちゃくちゃ腹立つツ！
カーナは握り拳に一瞬殺意が走るのを感じる。

「ほら、『お願いします、お母様』は？」

「うううう！いい、言いたくないけど仕方ないわ、お、お願いしますお母様！」

「おほほほ、仕方ないわね。そこまで言うならもう少し付き合っ
てあげる。偉大な母を持てたことに全身全霊を込めて感謝しなさいね。
あー気分いい」

高飛車全開のセリフを放ちながら、魔力遮断の魔術を繰り出す母。
カーナの怒りが弾け飛ぶ。

「もももも、もうッ！アツタマきたーッ！」

召喚続行

「もうアツタマきたーッ！」

カーナは両手をバツと開いて軽く旋回させた。燃え残り溶けかけた蝋燭が一瞬にして燃えつき、片隅に積まれていた新しい蝋燭が瞬時に燭台に突き刺さっていく。そして両手の指を鋭く鳴らすと、全部の蝋燭に一斉に火が点る。

「やるじゃないの」

母の淡々としたつぶやきに答えず、カーナは魔道書を手にして一気に呪文を詠唱し始めた。先ほどと同じ呪文では魔王を呼び出してしまうため、呪文の一部を独自に変更して望みを繋ぐカーナ。

「深淵の闇に君臨する数多の魔王、その忠実なる聡明な下僕たち、我はカーナ・ラトリー、我が呼びかけに応え給え！」

流れるように詠唱を終え、向かい合う魔法陣を睨むカーナ。先ほどと同じくじつとその様子を見つめていた母が、またもぼつりとつぶやいた。

「……カーナ、最近何か悩み事があるんじゃないの？」

「あるからこうして必死こいてんじゃないのよ！」

「やっぱり気付いてないのね。今あんた、『下僕たち』って言ったわよ。どれだけ呼び出すつもり？」

「えっ……」

ハッと息を飲むカーナ。次いで、血の気がサーッと引いていく。

目の前の魔法陣からはもうもうと煙が立ち昇り始め、先ほどとは比べ物にならないほどの嫌な匂いが地下室いっばいに立ち込めた。

「どどどど、どうしよう母様っ！」

「どうもこうも、詠唱しちゃったんだから責任もって何とかなさい」

やっぱしあんたは人でなしかい！

と思った瞬間。煙が軽い音を立てて弾けたかと思うと、何か得体の知れない掌大の灰色の物体が、もちもちと粘つきながら魔法陣いっばいにあふれ出した。

「ひええええ！ なっ なっ、何よこれ！？」

カーナが悲鳴を上げると、それらは魔法陣の中に蠢きながら、甲高い雑音のような声を発した。

『呼んだだろ』

『俺たち、呼んだだろ』

『呼んだだろ、俺たち最終管理担当部』

すくみ上がっていたカーナは、その言葉を聞いて少しだけ気が緩む。しかし呼び出そうとした契約管理室長ではないらしい。恐る恐る、カーナはそれら灰色の不定形の物体に問いかけてみた。

「あ、あの……最終管理担当部って……」

『魔王様の体内の毒素』

『出した毒素、綺麗に食う』

『魔王様の身体、すっきりさっぱり』

カーナの顔が引きつった。

後ろから、母が含み笑いをしながらトドメの一言を放つ。

「つまり、トイレ掃除の担当ね」

「うううう！『聡明な下僕』って言ったじゃない！何であんたたちみたいなのが出てくんのよッ！悔しいいいいい！」

カーナは両手の指を大きく弾いた。途端に部屋の蝋燭すべてが一気に燃え上がる。

『呼んだのはそっち。ひどい』

『地上界の娘、性悪』

『性格ブス』

「誰が性格ブスなのよッ!？」

しかしカーナが叫ぶよりちょっと早く蝋燭が燃え尽き、魔法陣いっぱいにもちもちと蠢いていた「最終管理担当部」の連中は消え去ってしまった。その後ろでは、滅多に笑わないカーナの母が必死に笑いを噛み殺していた。血管の一本くらいは確実にブツちぎれたであろうこめかみを押さえ、カーナは鋭く母に振り返った。

「母様ッ！笑ってないでさっさと魔力遮断の魔法を唱えて下さいッ！」

敬語を使いながらも、尊敬の意をカケラも感じさせないカーナの言葉に、母は声を殺して笑いながら、魔力遮断の魔法を唱えた。

魔道学校創設以来の才女と謳われたカーナには、それなりの自尊心があった。しかし今ここにきて、まさか身内にその自尊心を思いつきり踏みにじられようとは、一体誰が予想しただろうか。魔界の契約管理室長を呼び出さない限り、ずっと母に嘲笑され続けるのだ。

カーナは拳を握り締め、再び気合を入れなおす。

「今度こそ絶対に呼び出すわよ！見てらっしゃい！」

もはや、シオのことなど完璧にどーでもよかった。

飽くなき挑戦

その頃、とある建物の一室。

同じ深緑色のローブを着た数人の男たちが、同時に顔を上げて部屋の中央を見つめた。部屋の中には大きな水晶球が置かれていて、その色合いが微妙に変化し始めている。男のうちの一人が、中央の大きな机に座っている紳士に振り返った。

「局長、微弱ですが不審な波動を捉えました」

「……分かっておる」

精悍な顔立ちの紳士がお茶をすすりながら、気のない返事をする。砂糖菓子を一口に放り込み、同時に苦虫を噛み潰したような渋い顔をして立ち上がった。

「気にせずともよい、私が直々に様子を見てくるから」

「はい、そうしていただけると……今月四回目ですから、嚴重にお願いいたしますよ。異常がありましたら連絡いたしますので、今日は早退扱いということぞ」

「ん。そうしてちょ」

精悍な顔立ち台無しのおちやめなセリフを残し、紳士は部屋を出て行った。後に残された者たちは、そっと顔を見合わせる。

「……局長って、やっぱり変わってるよな」

「偉大な力を持つ人ってのは、どこかちょっと違うもんなんだろう。あれでも、異例の早さで魔道取締局長に昇任した御方だからな。」

カーナは息を切らせ、時折言葉に詰まりながら禁呪の詠唱を繰り返していた。

「深淵の闇に君臨する数多の魔王に仕えし、崇高なる任に従ずる忠実なる下僕、我はカーナ・ラトリー、我が呼びかけに応え給え！」

母は砂糖菓子とお茶のセットを持ってきて、小さなテーブルと椅子にその身を落ち着けていた。「どーせ時間かかるでしょーから」と無言で宣言しているような母の様子を努めて無視しながら、カーナは魔法陣の中心に立ち上る白い煙を睨んだ。

「ん？」

カーナが鼻をくんくんと鳴らす。そして母もまた、鼻をくんくんと鳴らしてつぶやいた。

「あら、いい匂い」

ぼうん。煙を弾いて魔法陣の中央に立ち上がったそれは、熊の様な毛むくじやらの顔をし、首と思しき周囲から軟体状の触手を無数に生やした、恐ろしく奇妙な姿の魔物だった。だが見た目の恐ろしさとは似ても似つかぬ静かな物腰で、その魔物はカーナに恭しく頭を下げる。

『お呼びでしょうか、お嬢様』

「え、えと、あの……あなたは」

『わたくしは、魔王様にお仕えしております料理長でございます』

落胆して天井を仰ぐカーナの後ろから、母がつかつかと歩み寄り興味津々の様子で問いかける。

「どうりでいい匂いがするわけだわ。今日のメニューは何？」

『ハイ、奥様。地獄犬のスペアリブ火炎茸添え、闇蝙蝠の冷製スープとなっております』

「私の口にあうような料理はできないかしら」

『お安い御用でございます、奥様』

「ちょっと母様ッ何勝手にオーダーしてんのよ！料理長さん、この人の言うことは聞かなくていいから、もう帰って！」

「そうねえ、魚料理でお願いしようかしら」

「とことん人の話を無視しないでくれるッ！？さっさと消えて！」

一気に燃え上がる蝋燭の灯り。料理長が触手の一つに掲げた鍋の蓋を取り、見事な魚の蒸し料理を披露した瞬間、蝋燭が燃え尽き料理長の姿がたち消える。あーあ、と声を上げ、母が恨めしげにカーナを見た。

「せっかく作ってくれたのに。礼儀を知らない子ね」

「そーゆー問題じゃないでしょーがッ！魔物の作った料理なんて食うヤツの気がしれないわ！」

「差別と偏見はよくないわ」

「あああもうッ！もういいわよっ、早く魔力遮断の魔法をかけてちょうだい！何が何でも次こそは契約管理室長を呼び出してやるから！」

「はいはい」

二つ返事の母を後ろから蹴り倒してやりたい衝動を必死に抑えつ

つ、カーナは再び蠟燭の準備をし、長い長い禁呪の詠唱を始める。
いい加減、半分以上禁呪を覚えてしまっていたが、間違わないように
に必死に言葉を言い繋いだ。

「深淵の闇に君臨する数多の魔王に仕えし、誉れ高き才腕を持つ忠
実なる下僕、我はカーナ・ラトリー、我が呼びかけに応え給え！」

ぼうん。今度は煙よりも早く、魔法陣から黒い体の細い男が立ち
上がった。全身がツヤツヤしていて、目も鼻もない。

『うはははは、誉れ高き才腕といやあ、研磨担当部主任の俺様さ！』
「け、研磨担当部？」
『俺様が磨いて差し上げた魔王様の爪は岩をも切り裂くぜ！』

カーナはがつくりとへたりこんで、だらしなく頬杖をついて魔物
を見上げた。

「つまり、爪磨き？」
『剣だつて磨くし槍だつて磨くぜベエベ！』

魔物が突然、壁際を指差した。カーナが振り向くと、壁に飾って
あった広刃の剣がふわりと浮き上がり、魔物の元へ滑るようにやっ
てくる。魔物はその剣を取ると大道芸人のように一気に口に突き入
れ、目まぐるしくも激しく踊り始めたではないか！カーナは意気消
沈しながら、激しくツイストやモンキーを踊り狂う魔物から目をそ
むけ、蠟燭を全部燃やし尽くす。

『見てくれ！俺のこの熱い魂のダンシングを！オウイエエエエエ
……』

声の余韻がじんわり残る魔法陣の中央には、魔物が飲み込んだ広刃の剣が残されていた。カーナがそっとそれを取ると、これまで見たこともないような鋭さに磨き上がっている。だが、あんなのを下僕にしている魔王はきつと、よっぽどお気楽かおマヌケなんだろうなと考えるカーナ。

母が剣の輝きを見つめながらつぶやいた。

「どうも、あんたの呼び出す魔物はみんな、どこかすつとこどつこいよね」

「……どっかの誰かさんの娘ですから」

「そうね。父様もちよつと抜けてるところがあるから、そこが似ちやったのかしらね」

「自分は勘定に入っとらんのかい！」

カーナが髪の毛を逆立てて怒鳴り散らした時、突然地下室の扉が開け放たれた。ハツとして身体が硬直するカーナと母が扉を見つめると、そこには威厳に満ちた紳士の姿があった。

「……何をしているのだね？」

契約の行方

地下室の扉から姿を現した紳士は、二つの魔法陣と、そこに立ちすくむカーナをじっと睨みつける。竦みあがったカーナとは対照的に、母は悪びれもせず、紳士に向かってひらひらと手を振った。

「あらあなた、お帰りなさい。早かったのね」

「お帰りなさいじゃないだろう、おまえ……」

カーナがため息をついた。

「もう！母様の魔法もあてにならないわね、いい加減に魔力遮断の魔法唱えたりするから、父様にばれちゃったじゃないの！」

「魔道取締局を甘く見ては困るよカーナ。まがりなりにも局長を務めるこの私は、おまえの偉大なる父なのだからね」

「その偉大なる父の娘は、魔物の召喚も満足にできないのよ。笑っちゃってこっちまで魔法唱え損なっちゃったわ」

「あんたの娘でもあるっつーのに！」

「とにかく、事情を説明しなさい。魔道取締局の局長として尋ねているのだよ、カーナ」

尊敬する父に言われては、さすがのカーナも事の次第を説明しなわけにはいかなかった。仕方なく、これまでの経緯を父に話して聞かせる。

「……というわけで、呪いの契約を解除しないと私、シオと別れなきやいけなくなっちゃうの。だから必死に契約管理室長を呼び出そうとしてたのよ」

父はカーナが話し終わると同時に、母をちらりと見やった。母は知らぬ振りで砂糖菓子をつまみながら、新しくお茶を入れている。

父はカーナに、小さな声でそっとつぶやいた。

「……それはな、母様の仕業だ。私が神術師の女と浮気をしないよう、母様が魔王を呼び出して、家そのものに呪いをかけたんだよ」
「へっ!？」

「常に冷静な顔をしていても、裏では煮えたぎるような情念を持っているんだよ、おまえの母様は。目的の為には手段を選ばぬ根性もあるしな」

「そ、それってスゲェいやな女なんじゃ……」

とにかく、何代前かの先祖が呪いを施したという母の話は、真っ赤なウソだったというわけだ。鋭く母を睨みつけ、カーナが烈火のごとく怒り出そうとしたのを、父はそっと制して耳打ちする。

「母様に口ごたえすると、十倍の威力をもって返されるぞ。今はとにかく、その呪いを解くのが先決だろう」

「で、でも……悔しいけど、なかなかその契約管理室長を呼び出せなくて……それでさっきから母様に馬鹿にされっぱなしなの!悔しいったらないわ!」

「それがあんたの実力なのよ」

「むむむムカツ!父様あ、何かいい方法ないかしら」

カーナが得意の可愛らしいおねだりポーズを決めて、父を上目遣いに見つめた。父は愛娘の仕草を見つめながら、この極めて優れた「媚び方」は確実に母親似だな、と考える。父はちよつと考えてから、カーナにこう提案した。

「回りくどい言い方をせずに、単刀直入に『契約管理室長出てこい』

と言ってみたらどうかね」

「え、そんな安易な呼び出し方でいいの？だってこの魔道書には……」

カーナが差し出した古い魔道書を手に取り、ぱらぱらとめくって見た父は呆れ返った様子で母に振り返る。

「おまえ、わざとこれをカーナに渡したね？」

「あら、何のことかしら」

「最新刊の魔道書はちゃんと書斎の机の上に出してあったはずだ。わざわざこんな半世紀も前のバックナンバーを出してきて、これじゃ魔界も混乱するはずだ」

父は軽く指を鳴らした。すると父の手にあった魔道書がすらりと消えて、代わりにカーナの手美しく新しい魔道書が現れる。カーナが慌ててそれを開いてみると、あれほど長ったらしかった魔王召喚の禁呪が、半分以上の長さになっているではないか。

「魔術の世界も進化しているのだよ、昔に比べて今は呪文も大分短くなっている。あんな古い魔道書の長文呪文で、よく魔物たちを呼び出せたものだ……さすが我が娘。素晴らしい才能だよカーナ」

「ほらね。褒めてもらえたのは私のおかげよ、感謝なさい」

「事の起りはすーべーてッ！あんたのせいでしょうがッ！」

カーナは両手を差し上げて部屋の四隅に蝋燭を灯すと、父と母の見守る前で新しい魔道書の禁呪を詠唱した。

「深淵の闇に佇む魔界の契約管理室長よ、我はカーナ・ラトリー、我が呼びかけに応え給え！」

魔法陣の中心に、白い煙がふわりと立ち昇ると、音もなくそこに影が立ち上がった。

『お呼びにより参上した、わたくしが魔界と地上界でかわされた契約のすべてを管理する責任者、契約管理室長だ』

深く吸い込まれそうな藍色の長い髪が揺れ、蠟のごとく白い肌に黒い瞳が映える。細く螺旋状になった二本の輝く角をもち、深紅の荘厳なローブをまとうその姿は、カーナがこれまでに見たこともないほど、麗しく美しい青年の姿の魔物だった。

思わず頬を赤らめ、カーナは叫んだ。

「!……す、素敵!なんてカッコイイの!」

「ほんと、いい男ね」

「私といい勝負だな」

背後の父母の会話も耳に入らぬカーナは、うっとり契約管理室長を見つめている。もはや、何のために契約管理室長を呼び出したのか忘れてしまうほど、その姿は魅力的だった。

契約管理室長はそんなカーナを見つめて、優しく微笑んだ。

『インキュバス(夢魔)のわたくしを呼び出して、普通でいられる地上界の女はおらぬ。こちらへおいでカーナとやら、わたくしとともに魔界で暮らさぬか……』

「はあい!暮らします!」

何も考えていないカーナの明るい声に、父が無言で指を鳴らした。一気に部屋中の蠟燭が焼失し、契約管理室長の姿もそれと同じくかき消える。カーナがあっと思う間もなく、魔法陣までが静かに消え去っていった。

「さすが魔界の者、契約を関単に破棄させぬよう夢魔を配していたとは……あのままでは、おまえは魂を抜かれ魔界に連れて行かれるところだったぞ、カーナ」

「ああん父様ったら、それでもよかったのに！あんな素敵な人見たことないんだもん、シオみたいなお子様より断然カッコイイし！」

きっぱりと断言するカーナを見つめ、母はやっぱり、というようにうなずいている。

「最初は契約解除に血眼だったのに……所詮あんたの恋心はその程度なのよ。可哀そうなシオくん」

「だってあんな素敵な人を見ちゃったら、乗り換えなきゃソンじゃない！」

「私は夢魔の義父になるつもりはないよ、あきらめなさい。それよりカーナ、呪いの解除は……」

「シオのことはもういいの、契約管理室長サマに比べたらあんなのもうどーでもいいわ！お願い父様、もう一度！もう一度呼び出していいでしょ！？」

「……だから魔法陣を消したのだよカーナ、夢魔に魅入られた者はしばらく心をかき乱されるからね。この地下室ではもう魔法陣を描けないようにしたから、クラスメートで我慢しときなさい」

ぶーぶー文句を言いつつ、必死に魔法陣を描こうとするカーナを残し、父は母のもとへ歩んでいってつぶやいた。

「……おまえももう禁呪を唱えてはいけないよ。今月四回目ということは、他にまだ何か余罪がありそうだが、何をしたんだね？」

「コレよ」

母は、テーブルの上の砂糖菓子を指差した。父も気に入ってよく食べている絶品の砂糖菓子をつまみ、母はにやりと笑う。

「だって、コレだけは魔界の菓子職人じゃないと作れないんですもの」

「ふむ……」

父も、砂糖菓子をつまんで口に入れた。

「……月に一度なら、許可しよう」

「そう言ってくれると思ったわ」

地下室の床にへばりついて何とか魔法陣を描こうと頑張るカーナをおいて、父母は地下室を後にする。カーナは二人がいなくなったことにも気付かず、インキュバスに惑わされた心をうきうきと躍らせ、魔法陣を描くことに夢中になっていた。

「愛しの契約管理室長サマ、今あなたのもとへ、カーナが参りますからね♪」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5128a/>

カーナ・ラトリーの受難

2010年10月10日04時01分発行